

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「アリゾナ大学での海外薬学研修を終えて」

研修期間：平成 26 年 2 月 23 日～3 月 9 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

090973370

山田 華衣

私は、平成26年2月23日から3月9日までの間、アリゾナ州にあるアリゾナ大学薬学部とその提携医療施設で約2週間の海外研修を行った。私が今回の研修に参加した理由は、アメリカの薬剤師がどのようにチーム医療の中で能力を発揮し、患者の薬物治療に貢献しているのか、日本より進んでいる薬剤師の職能の広さ、日本とアメリカの薬剤師の違い、アメリカの薬学教育の現場などについて、直接学びたいと思ったからである。

今回の海外研修では、ビッグチェーン薬局であるCVSとアリゾナ大学メディカルセンターを見学した。一方、大学内では1~3年生の講義に参加した他、医薬品情報、フィジカルアセスメント、IPEP (Interprofessional Education and Practice)、アリゾナ大学における実習教育、医療安全の講義を特別に受講した。また、小児科、精神科それぞれの専門薬剤師による講義も受けることができた。研修プログラムの中で特に印象に残った、「薬局における薬剤師の役割」と「アメリカの薬学生教育」について以下に述べる。

アメリカの薬局薬剤師は、調剤業務をほとんど行っておらず、主に患者へのカウンセリング・薬の説明を行っていた。現場の薬剤師にご説明頂いた中で非常に印象的であったのは、「顧客から薬剤師への質問の90%がOTCに関する内容であり、貧困のため医師の診察を受診できない患者もOTCで救うことができる為、OTCのカounselingは特に重要」と言われていた事である。また、アメリカでは日本と違い、リフィル制度、CDTM(collaborative drug therapy management : 共同薬物治療管理)、薬剤師による予防接種などの医療制度があることを学んだ。リフィル制度とは、麻薬や一部の抗不安薬などを除き、1枚の処方せんで複数回に分けて薬局で処方薬を受け取ることができる制度である。この制度により薬剤師は薬を分割して渡すだけでなく、患者の自宅に電話し、次の処方薬受け取り日が近いことを伝えていた。また、予防接種に関しては薬局のカウンターに予防接種に関する広告を置き、薬局で薬剤師が接種していた。一方、CDTMとは医師と薬剤師が契約を結び、その契約の範囲内で薬剤師が主体的に薬物療法を行うことができる制度であり、この制度により、「薬剤師が糖尿病、高血圧、高脂血症の薬物治療に介入することで医師のみの場合と比べ、病勢コントロールが良好になる」という報告を自らアピールする薬剤師のエピソードを聞くことができた。このようにアメリカの薬剤師は、自らの職域の広さ、職能の高さを積極的にアピールして能動的に行動し、社会に貢献している事が分かった。日本では、これらの医療制度はまだ導入されていないが、現行の制度の中でも積極的に患者・他の医療従事者と関わり、自分たちの職能の高さをアピールしていくことは必要であると感じた。

アメリカの薬局を見学して、アメリカの薬局薬剤師の良さだけでなく日本の薬局薬剤師の良さも実感することができた。具体的に述べると、アメリカではボトル調剤が主流だが、日本は高齢者など内服薬の管理が難しい患者に対して一包化調剤を行うことで服薬アドヒアランスの維持に貢献している点や、お薬手帳を日本全国全ての薬局で導入することで患者の使用している医薬品を正確に判断できる点などがある。

もう1つの印象に残ったアメリカの薬学生教育については、全ての学生が薬学部に入る前にPrepharmacy Curriculumとして化学や生物、物理などの基礎系科目の履修を終えている為、薬学部の授業は日本のものとは異なり、臨床に関する内容に重点が置かれていた。今回、1年生から3年生の授業に参加したが、授業の内容も1つの科目に対して化学、薬理学、遺伝学などの様々な分野の内容が組み込まれていて広い視点から理解を深める授業プログラムであった。また、学生が講義中、積極的に挙手し、

質問する姿も日本の薬学部では見られない光景であると感じた。他にもアリゾナ大学で行われている case discussionに参加した。これは、名城大学で4年次に行われる薬物治療学のような小グループで症例について討論する授業であるが、アリゾナ大学では1年次から導入し、70症例を行うそうだ。私達は1症例を1週間かけていたが、アリゾナ大学では3時間で3症例を討論していた。また、私達が行った症例検討はプロブレムを立ててSOAP形式で内容を細かく列挙していたが、アリゾナ大学のcase discussionはまずMissing informationとって討論を行う際に抜けていて、調べる必要のある項目を列挙し、プラン・フォローアップについて討論することで効率よく進めていた。

臨床研修についても日本で行われている実務実習とは違い、より高度なプロブレムが組まれていた。アリゾナ大学の臨床研修には、IPPE (Introductory Pharmacy Practice Experience)、RHPP (Rural Health Professions Program)、APPE (Advanced Pharmacy Practice Experience) の3種類がある。1年次から導入実習であるIPPEを行い、4年次にはより高度な実習であるAPPEを行う。2、3年次には病院・薬局で臨床実習を年間100時間ずつ行う。4年次に行うより高度なAPPEでは通常の実習に加えて、日本にはない外来臨床実習もカリキュラムに組まれていた。また、アリゾナ大学では学生が病棟実習を行う診療科を自ら希望できるため、高いモチベーションをもって研修が行えるのも魅力的だと感じた。更に、アリゾナ大学ではRHPPという特色ある地方での実習カリキュラムを導入していて、田舎で病院・薬局が少なく医療を十分に受けられない患者に対して地域の薬剤師がどのように関与していくかを学ぶことができるのも印象的であった。日本では地方で臨床実習を行うカリキュラムがない為、今後このような制度の導入が望まれる。

今回の研修を通して、アメリカ薬剤師の職能の広さと積極性の高さを感じた。病院においても薬局においても、薬剤師は調剤を行うのではなく、患者の薬物治療が適切かを考え、積極的にチーム医療に介入し、他の医療従事者に薬剤師の職能の広さを自ら積極的にアピールしていた。アメリカの薬剤師は日本の薬剤師よりも地位が高いと言われているが、それは単に受動的に得たものではなく、‘積極的’に努めた結果、患者・他職種から信頼を得て獲得したものだと感じた。日本の薬剤師もアメリカの薬剤師のように自らの職能のアピールし積極的に薬物治療に介入していけば、薬剤師としてさらに世間から必要とされる存在になっていくのではないかと感じた。アメリカの薬剤師が全てにおいて日本の薬剤師に勝っているわけではないが、日本の良い点を残しつつ、アメリカの優れた点を導入することで、患者に良い治療が提供できるように薬剤師としての職域を広げていくことが今後必要であると感じた。

最後にこのよう貴重な海外研修の機会を設けて下さったアリゾナ大学薬学部の先生方、そして引率して下さった野田幸裕教授、研修期間中支え合った研修メンバーに感謝致します。